

ココンマ圏と profunctor

alg-d

https://alg-d.com/math/kan_extension/

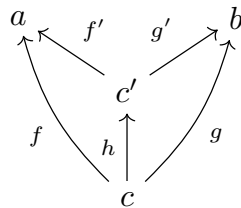
2025 年 1 月 31 日

これまで見てきた通り，圏論ではコンマ圏が非常に重要な役割を果たす．そうすると気になるのは，コンマ圏の双対となる「ココンマ圏」は存在するのであろうか，ということである．

定義．圏 C の図式 $a \leftarrow c \rightarrow b$ を a から b への span という．双対的に，図式 $a \rightarrow c \leftarrow b$ を a から b への cospan という．

定義． C を圏， $a, b \in C$ を対象とする． a から b への span がなす圏 $\text{Span}(a, b)$ を以下のように定める．

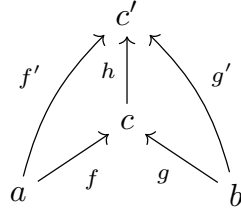
- $\text{Ob}(\text{Span}(a, b)) := \{\langle f, g \rangle \in \text{Mor}(C)^2 \mid c \in C, a \xleftarrow{f} c \xrightarrow{g} b\}$ とする．
- $\langle f, g \rangle, \langle f', g' \rangle \in \text{Span}(a, b)$ とする． $c := \text{dom}(f)$ ， $c' := \text{dom}(f')$ とする． $\langle f, g \rangle$ から $\langle f', g' \rangle$ への射は，次の図式を可換とする射 $h: c \rightarrow c'$ である．



また同様にして cospan がなす圏 $\text{Cospan}(a, b)$ が以下のように定まる．

- $\text{Ob}(\text{Cospan}(a, b)) := \{\langle f, g \rangle \in \text{Mor}(C)^2 \mid c \in C, a \xrightarrow{f} c \xleftarrow{g} b\}$ とする．
- $\langle f, g \rangle, \langle f', g' \rangle \in \text{Cospan}(a, b)$ とする． $c := \text{cod}(f)$ ， $c' := \text{cod}(f')$ とする． $\langle f, g \rangle$

から $\langle f', g' \rangle$ への射は, 次の図式を可換とする射 $h: c \rightarrow c'$ で定める.

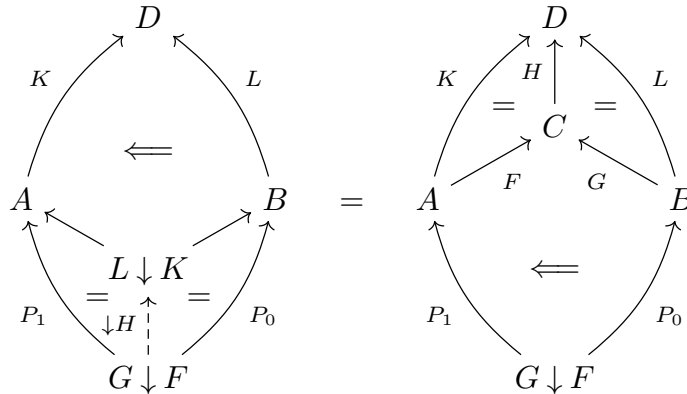


ここでは小圏の圏 **Cat** における span, cospan を考える.

$A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B$ を **Cat** の cospan としたとき, コンマ圏 $G \downarrow F$ は span $A \leftarrow G \downarrow F \rightarrow B$ を与えるのであった*¹.

命題 1. コンマ圏を取る操作は関手 $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ を与える.

証明. $A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B$, $A \xrightarrow{K} D \xleftarrow{L} B$ を cospan, $H: \langle F, G \rangle \rightarrow \langle K, L \rangle$ を $\text{Cospan}(A, B)$ の射とする. このとき関手 $\downarrow H: G \downarrow F \rightarrow L \downarrow K$ をコンマ圏の普遍性により定める.



普遍性により, これは明らかに関手 $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ を与える. □

そこで, もしこの関手が左随伴を持つとすると, それが「ココンマ圏を与える関手」であるとみなすことができる. というのも「コンマ圏の普遍性」の双対バージョン (定理 2) が成り立つからである.

それを説明するため, 関手 \downarrow が左随伴 $\uparrow: \text{Span}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ を持つとして, その unit を η とする. $A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B$ を span とすると $\uparrow \langle F, G \rangle$ は cospan であるから, それを $A \xrightarrow{Q_0} F \uparrow G \xleftarrow{Q_1} B$ と書くと, これのコンマ圏を考えることができる. このとき

*¹ 後の構成の都合上, $F \downarrow G$ ではなく $G \downarrow F$ を考える. ここを $F \downarrow G$ に変えた場合は, 後で出てくる $\mathbf{Prof}(A, B)$ が $\mathbf{Prof}(B, A)$ になる.

$S := \eta_{\langle F, G \rangle}$ は $\text{Span}(A, B)$ の射 $C \rightarrow Q_1 \downarrow Q_0$ (次の図式の点線の射) のことである (ここで P_0, P_1, θ はコンマ圏 $Q_1 \downarrow Q_0$ から得られる関手と自然変換である).

$$\begin{array}{ccccc}
 & & A & \xrightarrow{Q_0} & F \uparrow G \\
 & & \uparrow P_1 & \swarrow \theta & \uparrow Q_1 \\
 & & Q_1 \downarrow Q_0 & \xrightarrow{P_0} & B \\
 & & \uparrow & & \uparrow \\
 C & \xrightarrow{F} & & & \\
 & \searrow S & & & \nearrow G
 \end{array}$$

これらを合成して得られる自然変換を $\kappa: Q_1 G \Rightarrow Q_0 F$ とする.

定理 2. 関手 \downarrow が左随伴 $\uparrow: \text{Span}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ を持つとする. このとき上のように定義した図式

$$\begin{array}{ccc}
 A & \xrightarrow{Q_0} & F \uparrow G \\
 \uparrow F & \swarrow \kappa & \uparrow Q_1 \\
 C & \xrightarrow{G} & B
 \end{array}$$

は以下の普遍性を満たす. X を圏, $R_0: A \rightarrow X$, $R_1: B \rightarrow X$ を関手, $\beta: R_1 G \Rightarrow R_0 F$ を自然変換とする.

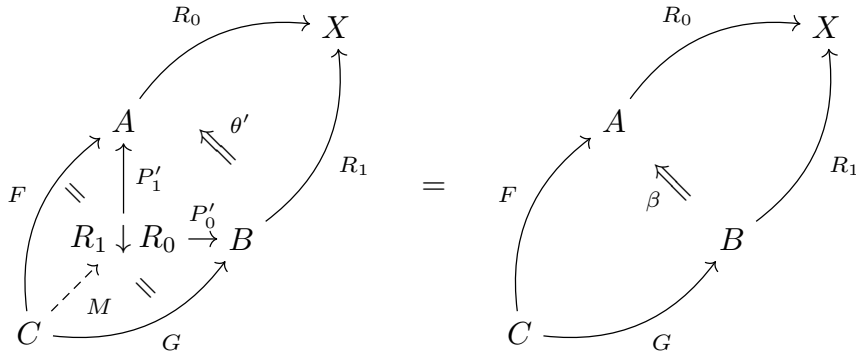
$$\begin{array}{ccc}
 A & \xrightarrow{R_0} & X \\
 \uparrow F & \swarrow \beta & \uparrow R_1 \\
 C & \xrightarrow{G} & B
 \end{array}$$

このとき関手 $H: F \uparrow G \rightarrow X$ が一意に存在して以下を満たす.

- (1) $HQ_0 = R_0$, $HQ_1 = R_1$ である.
- (2) 次の自然変換の等式が成り立つ.

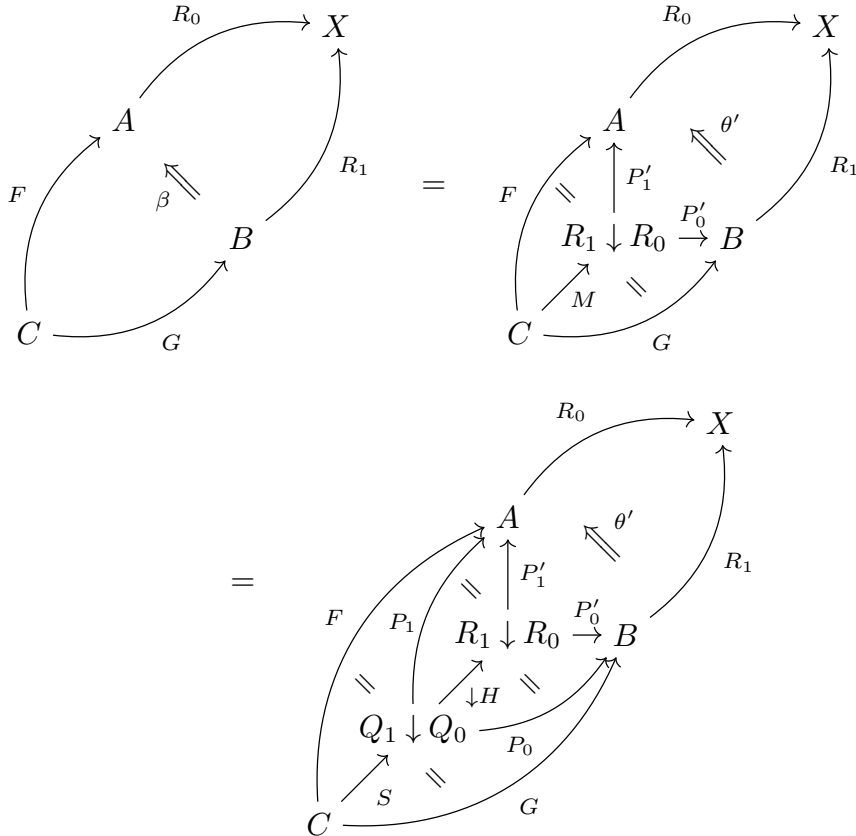
$$\begin{array}{ccc}
 \begin{array}{ccccc}
 & & A & \xrightarrow{Q_0} & F \uparrow G \\
 & & \uparrow F & \swarrow \kappa & \uparrow Q_1 \\
 & & C & \xrightarrow{G} & B \\
 & \searrow H & & & \nearrow R_1 \\
 & & X & & \\
 & \swarrow R_0 & & & \nwarrow R_1
 \end{array} & = & \begin{array}{ccc}
 & & X \\
 & & \uparrow R_0 \\
 & & A \\
 & \swarrow \beta & \\
 & & C \xrightarrow{G} B \\
 & \nwarrow R_1 & \\
 & & X
 \end{array}
 \end{array}$$

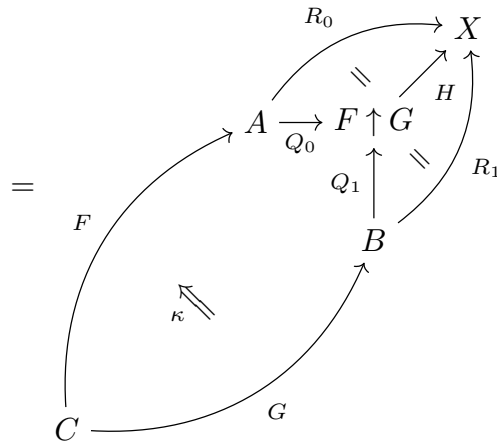
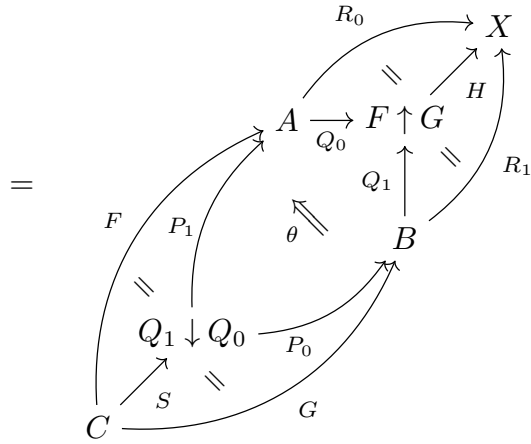
証明. まず H の存在を示す. そのためにコマ圏 $R_1 \downarrow R_0$ を取り, そこから得られる関手と自然変換を P'_0, P'_1, θ' とする. 普遍性により次の図式の点線の関手 $M: C \rightarrow R_1 \downarrow R_0$ が得られる.



このとき随伴 $\text{Hom}(\uparrow\langle F, G \rangle, \langle R_0, R_1 \rangle) \cong \text{Hom}(\langle F, G \rangle, \downarrow\langle R_0, R_1 \rangle)$ により, M の随伴射となる関手 $H: F \uparrow G \rightarrow X$ が取れる. これが条件 (1)(2) を満たすことを示す.

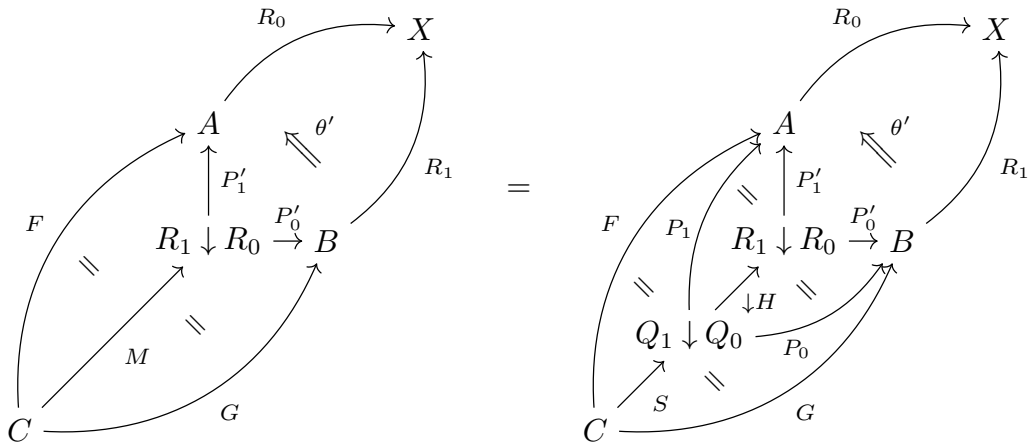
まず条件 (1) は, 定義より H が $\text{Cospan}(A, B)$ の射であるからよい. 条件 (2) を示そう. 随伴の unit の性質から $\downarrow H \circ S = M$ が成り立つ. 従って

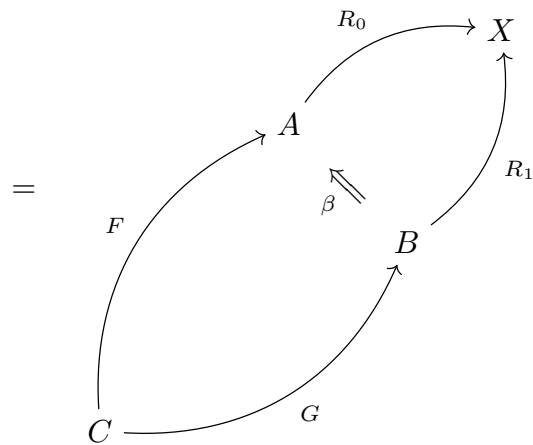
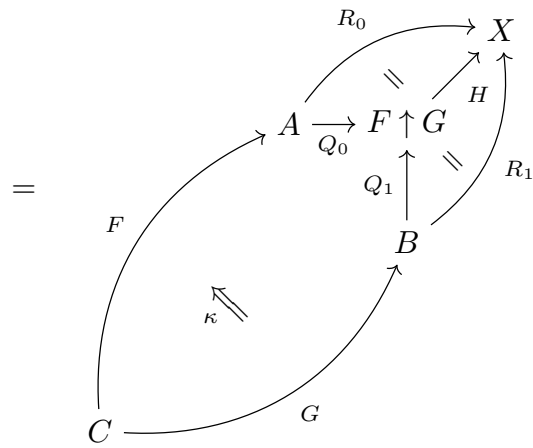
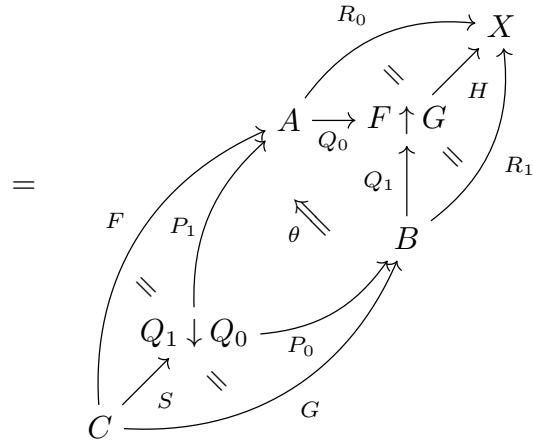




となり条件 (2) が成り立つ.

後は H の一意性を示せばよい. H が条件 (1)(2) を満たすとすると H は $\text{Cospan}(A, B)$ の射 $F \uparrow G \rightarrow X$ だから, 随伴射 $M: C \rightarrow R_1 \downarrow R_0$ が取れる. 従ってこの M が一意であることを示せばよい. 再び unit の性質から, これは $\downarrow H \circ S = M$ を満たす. 故に





となるから、 $R_1 \downarrow R_0$ の普遍性により M は一意である。 □

そこで問題は $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ が左随伴を持つか、ということになる。答えは存在する、であるが、これを構成するために profunctor というものを導入する。

定義. C, D を圏とする. C から D への profunctor^{*2} は関手 $P: C \rightarrow \widehat{D}$ のことである. profunctor を記号 $P: C \multimap D$ などと表す.

自然同型 $\text{Hom}_{\mathbf{Cat}}(A \times B, C) \cong \text{Hom}_{\mathbf{Cat}}(A, C^B)$ により, profunctor $P: C \multimap D$ 即ち関手 $P: C \rightarrow \widehat{D}$ と関手 $P: D^{\text{op}} \times C \rightarrow \mathbf{Set}$ を同一視することができる. 以下, 特に断らずこの同一視を行う. また C から D への profunctor がなす圏を $\mathbf{Prof}(C, D) := \mathbf{Set}^{D^{\text{op}} \times C}$ で定める.

定義. $P: A \multimap B, Q: B \multimap C$ に対して profunctor の合成 $Q \otimes P: A \multimap C$ を関手 $(y^\dagger Q) \circ P: A \rightarrow \widehat{C}$ で定める.

$$\begin{array}{ccccc}
 & & \widehat{B} & \xrightarrow{y^\dagger Q} & \widehat{C} \\
 & P \nearrow & \uparrow y & \nearrow Q & \\
 A & & B & &
 \end{array}$$

圏 C に対して米田埋込 $y: C \rightarrow \widehat{C}$ が定める profunctor を $\text{id}_C: C \multimap C$ で表す. 米田埋込と左 Kan 拡張の性質から容易に分かるように, $P: C \multimap D$ に対して $P \otimes \text{id}_C \cong P$ かつ $\text{id}_D \otimes P \cong P$ である.

命題 3. $P: A \multimap B, Q: B \multimap C$ を profunctor とするとき, $a \in A$ に対して

$$Q \otimes P(a) \cong \int^{b \in B} P(b, a) \times Q(-, b).$$

証明. $X \in \widehat{B}$ に対して $y^\dagger Q(X) \cong \int^{b \in B} \text{Hom}_{\widehat{B}}(y(b), X) \times Qb \cong \int^{b \in B} Xb \times Qb$ であるから $Q \otimes P(a) = y^\dagger Q(Pa) \cong \int^{b \in B} Pa(b) \times Qb = \int^{b \in B} P(b, a) \times Q(-, b)$. \square

$F: C \rightarrow D$ を関手とする. このとき profunctor $F_*: C \multimap D, F^*: D \multimap C$ が

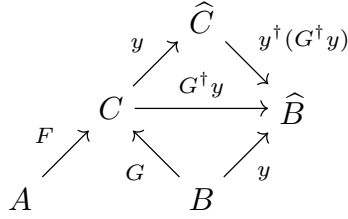
$$F_*(d, c) := \text{Hom}_D(d, Fc), \quad F^*(c, d) := \text{Hom}_D(Fc, d)$$

により定まる. つまり $F_*(c) = y \circ F(c) = F^{-1}y(c)$, $F^*(d) \cong F^\dagger y(d)$ である.

そこで cospan $A \xrightarrow{F} C \xleftarrow{G} B$ に対して profunctor $A \multimap B$ が $G^* \otimes F_*$ により得られる. これは

$$G^* \otimes F_* \cong (G^\dagger y) \otimes (y \circ F) \cong y^\dagger(G^\dagger y) \circ y \circ F$$

^{*2} 文献により色々な呼び方があり, distributor もしくは correspondence もしくは bimodule と呼ばれていることがある



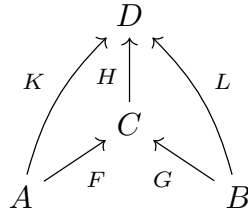
となる. ここで y が忠実充満より $y^\dagger(G^\dagger y) \circ y \cong G^\dagger y$ となるから $G^* \otimes F_* \cong (G^\dagger y) \circ F$ が分かる. そこで $\Phi\langle F, G \rangle := (G^\dagger y) \circ F$ と定める. 各点左 Kan 拡張の性質から, $a \in A$ に対して

$$\Phi\langle F, G \rangle(a) = G^\dagger y(Fa) \cong \text{Hom}_C(G-, Fa)$$

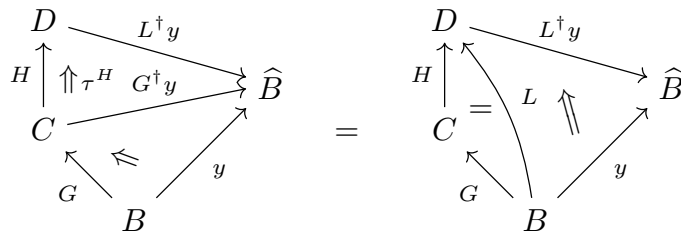
となる.

命題 4. $\Phi: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \mathbf{Prof}(A, B)$ は関手となる.

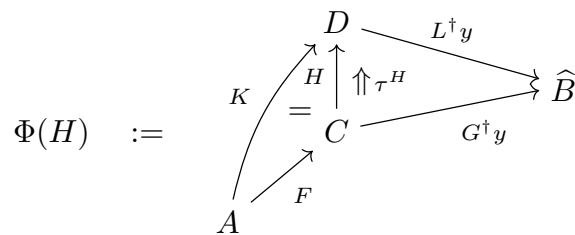
証明. $\text{Cospan}(A, B)$ の射 $H: \langle F, G \rangle \rightarrow \langle K, L \rangle$ (次の図式を参照) を取る.



ここで自然変換 τ^H を, 左 Kan 拡張 $G^\dagger y$ の普遍性により, 次の等号が成り立つように取る.

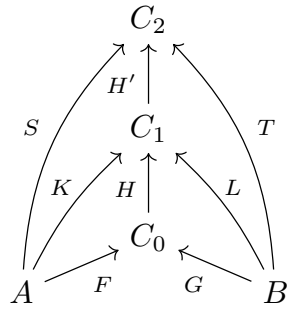


この τ^H を使って自然変換 $\Phi(H): \Phi\langle F, G \rangle \Rightarrow \Phi\langle K, L \rangle$ が得られる.

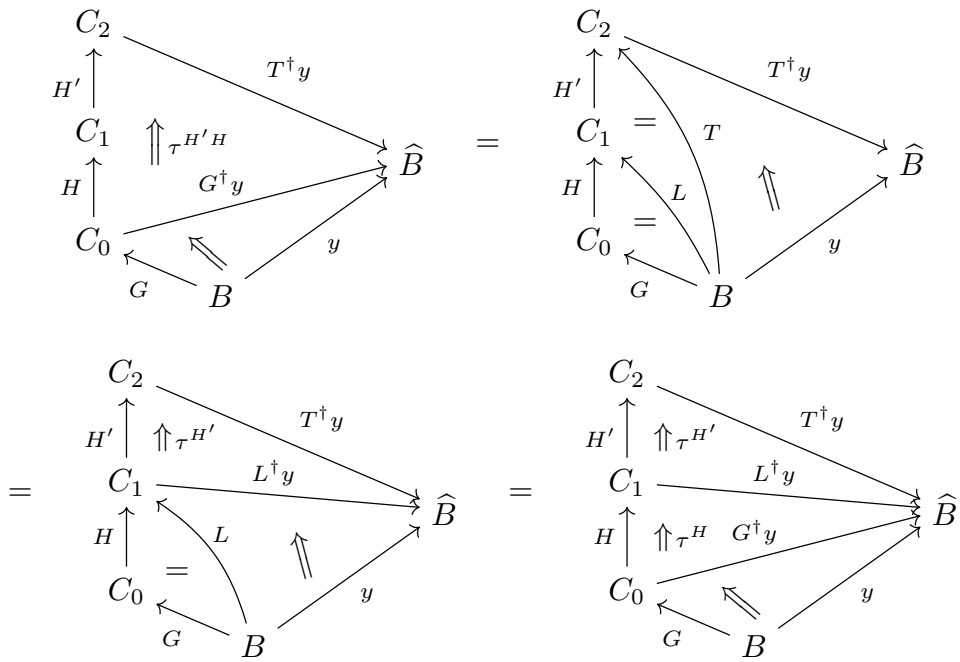


これにより Φ が関手になることを示せばよい.

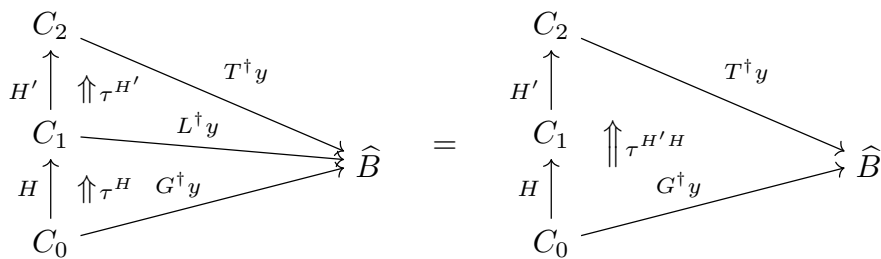
まず $H = \text{id}$ の場合は $G = L$ となるから $G^\dagger y = L^\dagger y$ であり, 故に $\tau^{\text{id}} = \text{id}$ となるから $\Phi(\text{id}) = \text{id}$ である. 故に Φ が合成と交換することを示せばよい. そこで H, H' を次の図式のような $\text{Cospan}(A, B)$ の射とする.



このとき τ の定義より



となるから, 左 Kan 拡張 $G^\dagger y$ の普遍性により

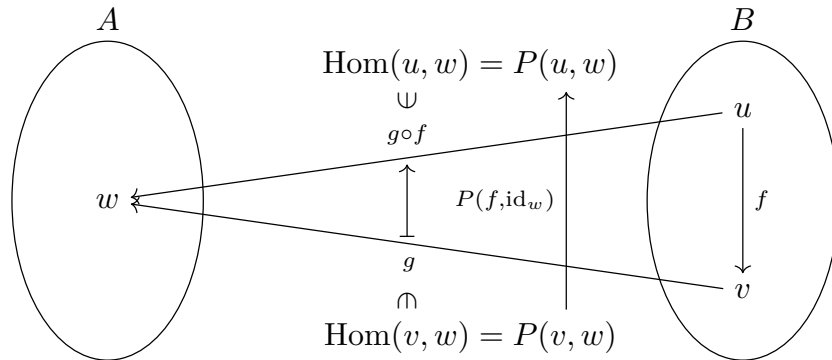


となるので $\Phi(H'H) = \Phi(H')\Phi(H)$ が分かる。 \square

逆に profunctor $P: A \rightleftarrows B$ に対して cospan $\Sigma(P) = (A \xrightarrow{F_P} C_P \xleftarrow{G_P} B)$ を以下のように定義することができる。まず圏 C_P を次により定める。

- $\text{Ob}(C_P) := \text{Ob}(A) \sqcup \text{Ob}(B)$.
- $\text{Hom}_{C_P}(u, v) := \begin{cases} \text{Hom}_A(u, v) & (u, v \in A \text{ のとき}) \\ \text{Hom}_B(u, v) & (u, v \in B \text{ のとき}) \\ \emptyset & (u \in A, v \in B \text{ のとき}) \\ P(u, v) & (u \in B, v \in A \text{ のとき}) \end{cases}$
- 射 $f: u \rightarrow v, g: v \rightarrow w$ の合成 $g \circ f$ を次で定める。

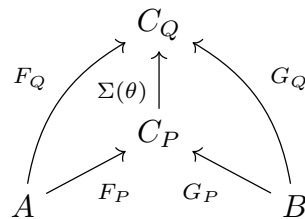
$$g \circ f := \begin{cases} g \circ f & (u, v, w \in A \text{ のとき}) \\ g \circ f & (u, v, w \in B \text{ のとき}) \\ P(f, \text{id}_w)(g) & (u, v \in B, w \in A \text{ のとき. 下図参照}) \\ P(\text{id}_u, g)(f) & (u \in B, v, w \in A \text{ のとき}) \end{cases}$$



関手 $F_P: A \rightarrow C_P, G_P: B \rightarrow C_P$ を標準的な埋込とすれば $\Sigma(P) \in \text{Cospan}(A, B)$ である。

命題 5. $\Sigma: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ は関手となる。

証明. $\mathbf{Prof}(A, B)$ の射 $\theta: P \Rightarrow Q$ に対して $\text{Cospan}(A, B)$ の射 $\Sigma(\theta): \Sigma(P) \rightarrow \Sigma(Q)$, 即ち次の図式が可換となるような関手 $\Sigma(\theta)$ を定めたい。



そのためには対象 $a \in A$, $b \in B$ に対して写像 $\Sigma(\theta): \text{Hom}_{C_P}(b, a) \rightarrow \text{Hom}_{C_Q}(b, a)$ をうまく定めればよい. Hom_{C_P} の定義から $\Sigma(\theta) := \theta_{ba}: P(b, a) \rightarrow Q(b, a)$ と定義することができる. これにより $\Sigma(\theta)$ は関手になる.

∴) 定義から $\Sigma(\theta)(\text{id}) = \text{id}$ は明らかである. 従って $f: u \rightarrow v$, $g: v \rightarrow w$ としたときに $\Sigma(\theta)(g \circ f) = \Sigma(\theta)(g) \circ \Sigma(\theta)(f)$ となることを示せばよい.

(i) $u, v, w \in A$ または $u, v, w \in B$ の場合, 明らか.

(ii) $u, v \in B$, $w \in A$ の場合, 定義から

$$\Sigma(\theta)(g \circ f) = \theta_{uw}(g \circ f), \quad \Sigma(\theta)(g) = \theta_{vw}(g), \quad \Sigma(\theta)(f) = f$$

であり, 一方 θ が自然変換だから $\theta_{uw}(g \circ f) = \theta_{vw}(g) \circ f$ が分かる.

$$\begin{array}{ccc} P(u, w) & \xrightarrow{\theta_{uw}} & Q(u, w) \\ \uparrow P(f, \text{id}_w) & & \uparrow Q(f, \text{id}_w) \\ P(v, w) & \xrightarrow{\theta_{vw}} & Q(v, w) \end{array} \quad \begin{array}{ccc} g \circ f & \xrightarrow{\theta_{uw}} & \theta_{uw}(g \circ f) \\ \uparrow P(f, \text{id}_w) & & \uparrow \theta_{vw}(g) \circ f \\ g & \xrightarrow{\theta_{vw}} & \theta_{vw}(g) \\ & & \uparrow Q(f, \text{id}_w) \end{array}$$

(iii) $u \in B$, $v, w \in A$ の場合, 定義から

$$\Sigma(\theta)(g \circ f) = \theta_{uw}(g \circ f), \quad \Sigma(\theta)(g) = g, \quad \Sigma(\theta)(f) = \theta_{uv}(f)$$

であり, 一方 θ が自然変換だから $\theta_{uw}(g \circ f) = g \circ \theta_{uv}(f)$ が分かる.

$$\begin{array}{ccc} P(u, v) & \xrightarrow{\theta_{uv}} & Q(u, v) \\ \downarrow P(\text{id}_u, g) & & \downarrow Q(\text{id}_u, g) \\ P(u, w) & \xrightarrow{\theta_{uw}} & Q(u, w) \end{array} \quad \begin{array}{ccc} f & \xrightarrow{\theta_{uv}} & \theta_{uv}(f) \\ \downarrow P(\text{id}_u, g) & & \downarrow Q(\text{id}_u, g) \\ g \circ f & \xrightarrow{\theta_{uw}} & \theta_{uw}(g \circ f) \\ & & \uparrow g \circ \theta_{uv}(f) \end{array}$$

以上により $\Sigma(\theta)$ は関手であることが分かった.

これにより Σ が関手になることを示す. Σ の定義より $\Sigma(\text{id}) = \text{id}$ は明らかである. そこで $\theta: P \Rightarrow Q$, $\sigma: Q \Rightarrow R$ に対して $\Sigma(\sigma \circ \theta) = \Sigma(\sigma) \circ \Sigma(\theta)$ を示す. そのためには $a \in A$, $b \in B$ に対して $(\sigma \circ \theta)_{ba} = \sigma_{ba} \circ \theta_{ba}$ を示せばよいが, それは自然変換の合成の定義である. \square

命題 6. 随伴 $\Sigma \dashv \Phi: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \mathbf{Cospan}(A, B)$ が成り立つ. 更にこの随伴の unit

よってこの図式の b 成分を考えると次の可換図式を得る.

$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}_{C_P}(b, b) & \xrightarrow{G} & \text{Hom}_C(Gb, Gb) & \quad & \text{id}_b & \xrightarrow{G} & \text{id}_{Gb} \\
 \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\
 \text{Hom}_{C_P}(b, a) & \xrightarrow{\widetilde{\varphi(H)}_{ba}} & \text{Hom}_C(Gb, Fa) & & f & \xrightarrow{\widetilde{\varphi(H)}_{ba}} & Hf
 \end{array}$$

従って写像 $\widetilde{\varphi(H)}_{ba}$ は $H: P(b, a) \rightarrow \text{Hom}_C(Gb, Fa)$ と一致しているから φ は単射である.

全射であることを示す. そのために $\theta: P \Rightarrow \Phi\langle F, G \rangle$ を自然変換とする. H を

$$\begin{aligned}
 & \bullet \text{ 対象 } x \in C_P \text{ に対して } Hx := \begin{cases} Fx & (x \in A) \\ Gx & (x \in B) \end{cases} \\
 & \bullet \text{ 射 } f: u \rightarrow v \text{ に対して } Hf := \begin{cases} Ff & (u, v \in A) \\ Gf & (u, v \in B) \\ \tilde{\theta}_{uv}(f) & (u \in B, v \in A) \end{cases}
 \end{aligned}$$

と定義する. この $H: C_P \rightarrow C$ は関手である.

(\therefore) $H(\text{id}) = \text{id}$ は明らかなので $f: u \rightarrow v, g: v \rightarrow w$ として $H(g \circ f) = Hg \circ Hf$ を示す.

(i) $u, v, w \in A$ または $u, v, w \in B$ の場合, 明らか.

(ii) $u, v \in B, w \in A$ の場合, 定義から

$$H(g \circ f) = \tilde{\theta}_{uw}(g \circ f), \quad Hg = \tilde{\theta}_{vw}(g), \quad Hf = Gf$$

であり, 一方 $\tilde{\theta}$ が自然変換だから $\tilde{\theta}_{uw}(g \circ f) = \tilde{\theta}_{vw}(g) \circ Gf$ である.

$$\begin{array}{ccc}
 P(u, w) & \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uw}} & \text{Hom}_C(Gu, Fw) & & g \circ f & \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uw}} & \tilde{\theta}_{uw}(g \circ f) \\
 \uparrow P(f, \text{id}_w) & & \uparrow - \circ Gf & & \uparrow P(f, \text{id}_w) & & \tilde{\theta}_{vw}(g) \circ Gf \\
 P(v, w) & \xrightarrow{\tilde{\theta}_{vw}} & \text{Hom}_C(Gv, Fw) & & g & \xrightarrow{\tilde{\theta}_{vw}} & \tilde{\theta}_{vw}(g) \\
 & & & & & & \uparrow - \circ Gf
 \end{array}$$

(iii) $u \in B, v, w \in A$ の場合, 定義から

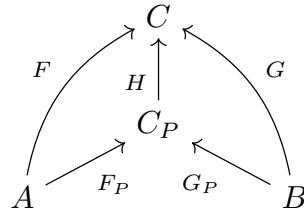
$$H(g \circ f) = \tilde{\theta}_{uw}(g \circ f), \quad Hg = Fg, \quad Hf = \tilde{\theta}_{uv}(f)$$

であり, 一方 $\tilde{\theta}$ が自然変換だから $\tilde{\theta}_{uw}(g \circ f) = Fg \circ \tilde{\theta}_{uv}(f)$ である.

$$\begin{array}{ccc}
 P(u, v) \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uv}} \text{Hom}_C(Gu, Fv) & & f \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uv}} \tilde{\theta}_{uv}(f) \\
 P(\text{id}_u, g) \downarrow & \text{---} & \downarrow Fg \circ - \\
 P(u, w) \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uw}} \text{Hom}_C(Gu, Fw) & & Fg \circ \tilde{\theta}_{uv}(f) \\
 & & \downarrow \\
 & & g \circ f \xrightarrow{\tilde{\theta}_{uw}} \tilde{\theta}_{uw}(g \circ f)
 \end{array}$$

以上により H は関手であることが分かった.

このとき明らかに $HF_P = F$, $G_P H = G$ だから H は射 $\Sigma(P) \rightarrow \langle F, G \rangle$ である.



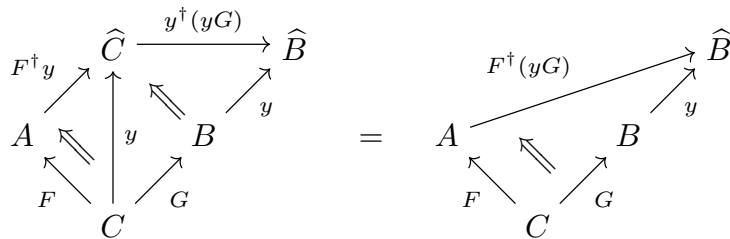
上で示したように $\widetilde{\varphi(H)}_{ba}$ は $H: P(b, a) \rightarrow \text{Hom}_C(Gb, Fa)$ と一致しているから, H の定義より $\widetilde{\varphi(H)}_{ba} = \tilde{\theta}_{ba}$ である. 故に $\varphi(H) = \theta$ となり φ は全射である.

定義から明らかに φ は自然である. 従って随伴 $\Sigma \dashv \Phi$ が成り立つ. φ の定義よりこの随伴の unit は η であり, これは同型である. □

unit が同型だから $\Sigma: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \text{Cospan}(A, B)$ は忠実充満である (「随伴」の PDF を参照).

次に $\text{span } A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B$ に対して profunctor $A \dashv B$ が $G_* \otimes F^*$ により得られる. これは各点左 Kan 拡張の一般論により

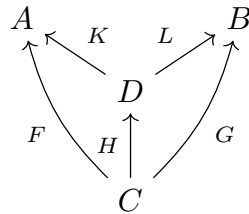
$$G_* \otimes F^* \cong (yG) \otimes (F^\dagger y) \cong y^\dagger(yG) \circ F^\dagger y \cong F^\dagger(yG)$$



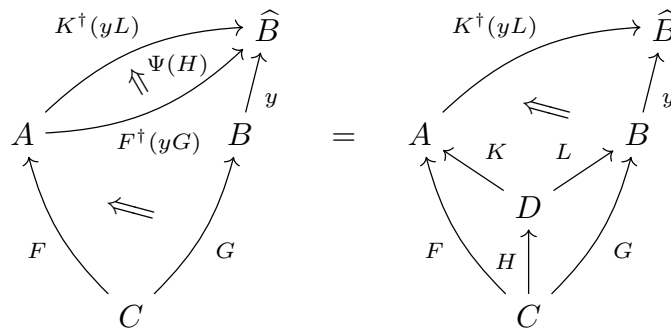
となる. そこで $\Psi\langle F, G \rangle = F^\dagger(yG)$ と定める.

命題 7. $\Psi: \text{Span}(A, B) \rightarrow \mathbf{Prof}(A, B)$ は関手となる.

証明. $\text{Span}(A, B)$ の射 $H: \langle F, G \rangle \rightarrow \langle K, L \rangle$ (次の図式を参照) を取る.

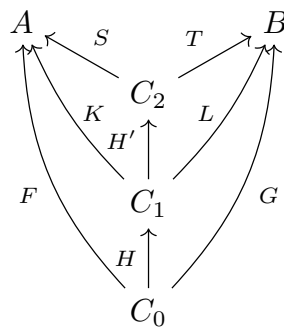


左 Kan 拡張の普遍性により自然変換 $\Psi(H): \Psi\langle F, G \rangle \Rightarrow \Psi\langle K, L \rangle$ が得られる.

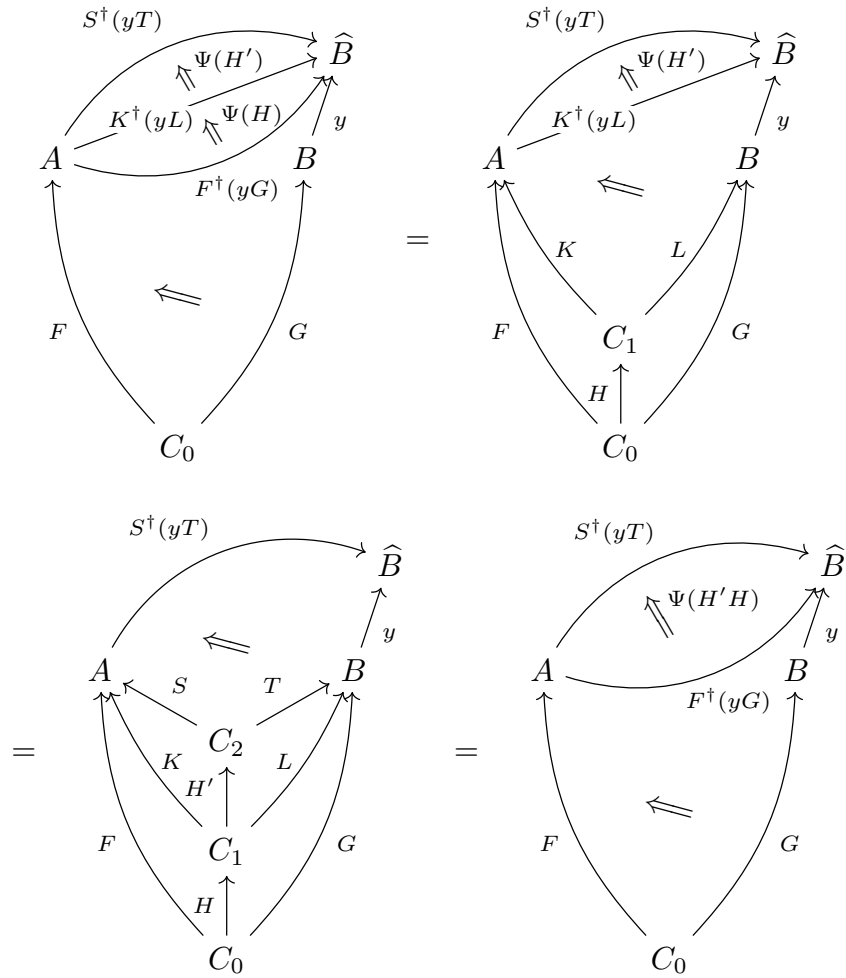


これにより Ψ が関手となることを示そう.

まず明らかに $\Psi(\text{id}) = \text{id}$ である. よって Ψ が合成と交換することを示せばよい. そこで $\text{Span}(A, B)$ の射 H, H' を次の図式のように取る.



このとき



より普遍性から $\Psi(H'H) = \Psi(H')\Psi(H)$ が分かる. □

関手 $\Lambda: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \mathbf{Span}(A, B)$ を $\Lambda := \downarrow \circ \Sigma$ で定義する. (後に $\Psi \dashv \Lambda$ が分かる (命題 12).)

$$\begin{array}{ccccc}
 \mathbf{Span}(A, B) & \xrightarrow{\Psi} & \mathbf{Prof}(A, B) & \xrightarrow{\Sigma} & \mathbf{Cospan}(A, B) \\
 & \xleftarrow{\Lambda} & & \xleftarrow{\Phi} & \\
 & & \downarrow & & \\
 & & & &
 \end{array}$$

profunctor $P: A \rightleftarrows B$ に対して $\Lambda(P) = (A \xleftarrow{F^P} C^P \xrightarrow{G^P} B)$ と書く.

$$\begin{array}{ccc}
 & C^P & \\
 F^P \nearrow & & \nwarrow G^P \\
 A & \rightleftarrows & B \\
 F^P \nwarrow & & \nearrow G^P \\
 & G^P \downarrow F^P & \\
 & \parallel & \\
 & C^P &
 \end{array}$$

コンマ圏の定義より, 圏 C^P は以下のような圏である.

- $\text{Ob}(C^P) = \{\langle a, b, f \rangle \mid a \in A, b \in B, f \in P(b, a)\}$ である.
- $\langle a, b, f \rangle, \langle a', b', f' \rangle \in \text{Ob}(C^P)$ に対して

$$\text{Hom}_{C^P}(\langle a, b, f \rangle, \langle a', b', f' \rangle) = \left\{ \langle g, h \rangle \mid \begin{array}{l} g: a \rightarrow a', h: b' \rightarrow b, \\ P(h, g)(f) = f' \end{array} \right\}.$$

$\theta: P \rightleftarrows Q$ を $\mathbf{Prof}(A, B)$ の射とする. Λ はコンマ圏を使って定義しているから, $\Lambda(\theta)$ は次の等式を満たすような関手 $C^P \rightarrow C^Q$ である.

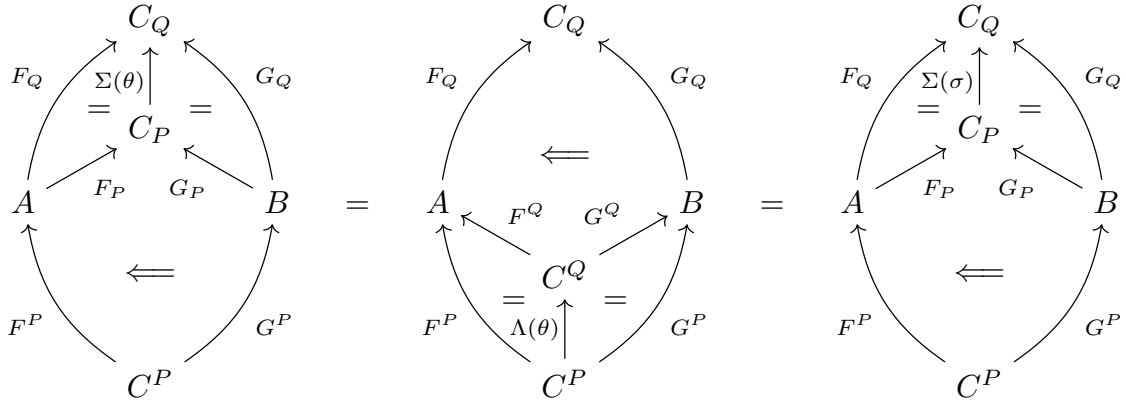
$$\begin{array}{ccc}
 \begin{array}{ccc}
 & C_Q & \\
 F_Q \nearrow & & \nwarrow G_Q \\
 A & \rightleftarrows & B \\
 F^P \nwarrow & & \nearrow G^P \\
 & C^Q & \\
 = \uparrow & & \downarrow = \\
 & \Lambda(\theta) & \\
 & \uparrow & \\
 & C^P &
 \end{array}
 & = &
 \begin{array}{ccc}
 & C_Q & \\
 F_Q \nearrow & & \nwarrow G_Q \\
 A & \rightleftarrows & B \\
 F^P \nwarrow & & \nearrow G^P \\
 & C^P & \\
 & \rightleftarrows & \\
 & C^P &
 \end{array}
 \end{array}$$

命題 8. $\Lambda: \mathbf{Prof}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ は忠実充満である.

証明. $P, Q \in \mathbf{Prof}(A, B)$ とする.

まず忠実であることを示す. $\theta, \sigma: P \rightleftarrows Q$ が $\Lambda(\theta) = \Lambda(\sigma)$ を満たすとする. このとき $a \in A, b \in B$ に対して $\theta_{ba} = \sigma_{ba}$ であることを示せばよい. (ここで θ_{ba} と σ_{ba} は写像

$P(b, a) \rightarrow Q(B, a)$ である.) Λ の定義より



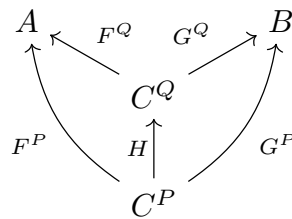
である. ここで $f \in P(b, a)$ とすると $\langle a, b, f \rangle$ は C^P の対象だから $\Sigma(\theta)(f) = \Sigma(\sigma)(f)$ となる. 故に Σ の定義から $\theta_{ba}(f) = \Sigma(\theta)(f) = \Sigma(\sigma)(f) = \sigma_{ba}(f)$ となって $\theta_{ba} = \sigma_{ba}$ である.

次に充満であることを示すため $H: \Lambda(P) \rightarrow \Lambda(Q)$ とする. $\theta: P \Rightarrow Q$ を定義しよう. そのために $b \in B, a \in A$ を取り $f \in P(b, a)$ とする. このとき $\langle a, b, f \rangle \in C^P$ だから $H\langle a, b, f \rangle \in C^Q$ である. 圏 C^P の定義より $H\langle a, b, f \rangle = \langle a, b, \theta_{ba}(f) \rangle$ と書ける. これにより写像 $\theta_{ba}: P(b, a) \rightarrow Q(b, a)$ が定まる. θ_{ba} は $b \in B, a \in A$ について自然である.

∴ $g: a \rightarrow a', h: b' \rightarrow b$ とする. 次の図式が可換であることを示せばよい.

$$\begin{array}{ccc} P(b, a) & \xrightarrow{\theta_{ba}} & Q(b, a) \\ P(h, g) \downarrow & & \downarrow Q(h, g) \\ P(b', a') & \xrightarrow{\theta_{b'a'}} & Q(b', a') \end{array}$$

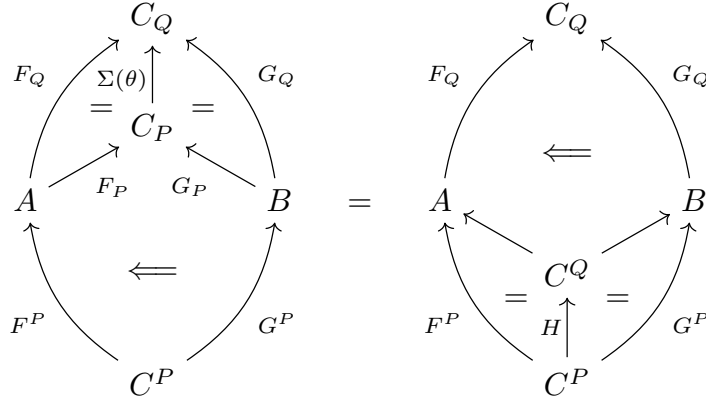
$f \in P(b, a)$ を取り $f' := P(h, g)(f)$ とする. このとき $\langle g, h \rangle: \langle a, b, f \rangle \rightarrow \langle a', b', f' \rangle$ は C^P の射である. 故に $H\langle g, h \rangle: H\langle a, b, f \rangle \rightarrow H\langle a', b', f' \rangle$ は C^Q の射である. 一方で H は span の射だから次の図式が可換である.



従って $H\langle g, h \rangle = \langle g, h \rangle$ となる. 故に $\langle g, h \rangle: \langle a, b, \theta_{ba}(f) \rangle \rightarrow \langle a', b', \theta_{b'a'}(f') \rangle$ が C^Q

の射だから $Q(h, g)(\theta_{ba}(f)) = \theta_{b'a'}(f') = \theta_{b'a'}(P(h, g)(f))$ となる。

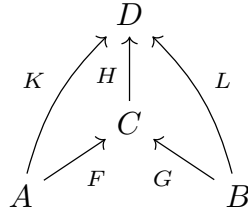
よって $\theta: P \Rightarrow Q$ となる。このとき定義から明らかに等式



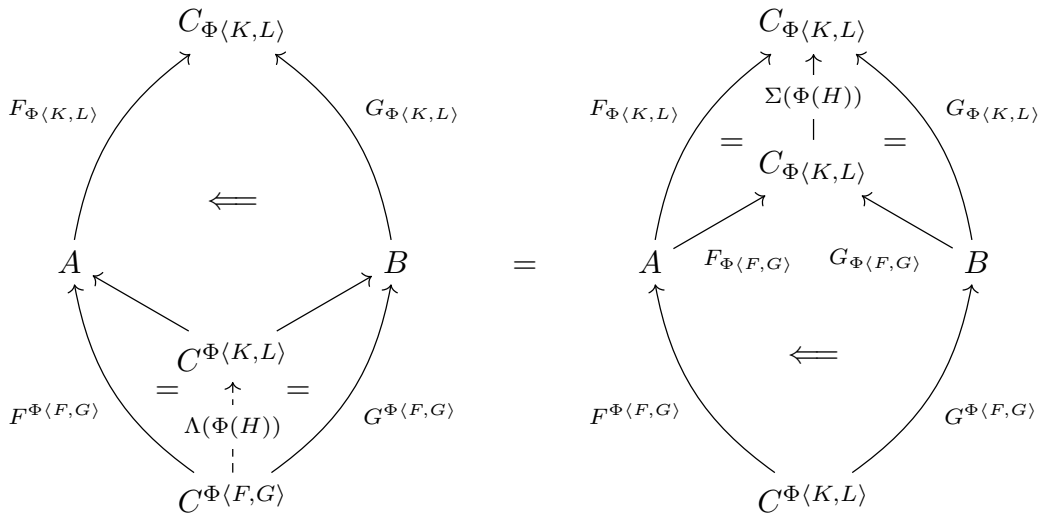
が成り立つ。故に Λ の定義より $\Lambda(\theta) = H$ である。 □

命題 9. $\Lambda \circ \Phi \cong \downarrow$ である。

証明. $\text{Cospan}(A, B)$ の射 $H: \langle F, G \rangle \rightarrow \langle K, L \rangle$ (次の図式を参照) を取る。



定義より $\Lambda(\Phi(H))$ は



で与えられる関手である。ここで

$$\Phi\langle F, G \rangle \cong \text{Hom}_C(G-, F-), \quad \Phi\langle K, L \rangle \cong \text{Hom}_D(L-, K-)$$

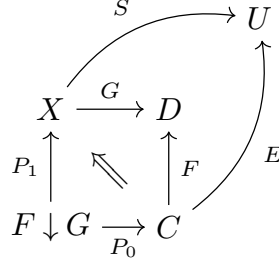
であるから $C^{\Phi\langle F, G \rangle} \cong G \downarrow F$, $C^{\Phi\langle K, L \rangle} \cong L \downarrow K$ であり, $\Sigma(\Phi(H))$ は

$$H: \text{Hom}_C(Gb, Fa) \rightarrow \text{Hom}_D(Lb, Ka)$$

により定まる関手である。よって $\Lambda \circ \Phi \cong \downarrow$ である。 □

ここで補題を1つ証明する。

補題 10. $X \xrightarrow{G} D \xleftarrow{F} C$ と $X \xrightarrow{S} U \xleftarrow{E} C$ を cospan として, コンマ圏 $F \downarrow G$ を考える。



このとき全単射

$$\kappa: \text{Hom}_{\mathbf{Prof}(X, C)}(\text{Hom}_D(F-, G\Box), \text{Hom}_U(E-, S\Box)) \rightarrow \text{Hom}_{U \downarrow F \downarrow G}(EP_0, SP_1)$$

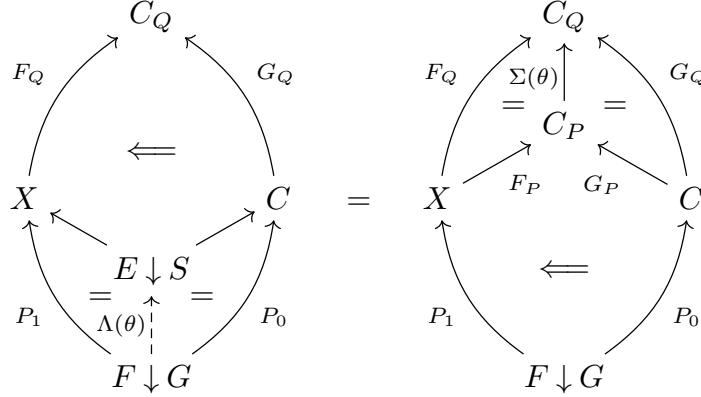
が存在する。更にこの全単射は $S \in U^X$ について自然である。

証明. まず Λ の定義より $\Lambda(\text{Hom}_D(F-, G\Box)) = F \downarrow G$ である。命題 8 により Λ は忠実充満だから全単射

$$\text{Hom}_{\mathbf{Prof}(X, C)}(\text{Hom}_D(F-, G\Box), \text{Hom}_U(E-, S\Box)) \cong \text{Hom}_{\text{Span}(X, C)}(F \downarrow G, E \downarrow S)$$

が得られる。この全単射で $\theta: \text{Hom}_D(F-, G\Box) \Rightarrow \text{Hom}_U(E-, S\Box)$ に対応するのは関手 $\Lambda(\theta): F \downarrow G \rightarrow E \downarrow S$ である。この関手は定義より次の等式によって定まる関手である

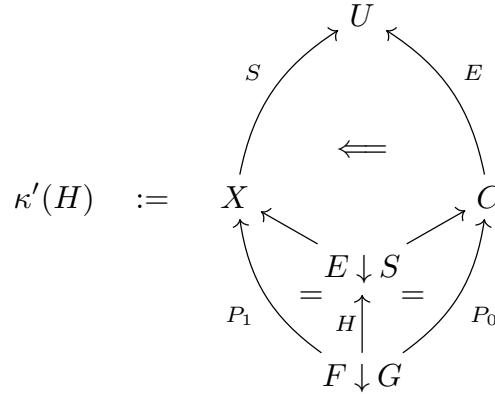
(但し $P := \text{Hom}_D(F-, G\Box)$, $Q := \text{Hom}_U(E-, S\Box)$ と書いた).



特に対象 $\langle c, x, f \rangle \in F \downarrow G$ に対して $\Lambda(\theta)\langle c, x, f \rangle = \langle c, x, \theta_{cx}(f) \rangle$ となる. 次にコマ圏 $E \downarrow S$ の普遍性から全単射

$$\text{Hom}_{\text{Span}(X, C)}(F \downarrow G, E \downarrow S) \cong \text{Hom}_{U^{F \downarrow G}}(EP_0, SP_1)$$

が得られる. この全単射は $H: F \downarrow G \rightarrow E \downarrow S$ に対して, 自然変換



を対応させる全単射である. 従って $\kappa(\theta)_{\langle c, x, f \rangle} := \kappa'(\Lambda(\theta))_{\langle c, x, f \rangle} = \theta_{cx}(f)$ と定義すればこれが全単射

$$\kappa: \text{Hom}_{\mathbf{Prof}(X, C)}(\text{Hom}_D(F-, G\Box), \text{Hom}_U(E-, S\Box)) \rightarrow \text{Hom}_{U^{F \downarrow G}}(EP_0, SP_1)$$

を定める. この κ が $S \in U^X$ について自然であることを示すため $\xi: S \Rightarrow S'$ を自然変換とする. $\zeta: \text{Hom}_U(E-, S\Box) \Rightarrow \text{Hom}_U(E-, S'\Box)$ を

$$\zeta_{cx} := \xi_x \circ -: \text{Hom}_U(Ec, Sx) \Rightarrow \text{Hom}_U(Ec, S'x)$$

により定めたとき

$$\begin{array}{ccc} \mathrm{Hom}_{\mathbf{Prof}(X,C)}(\mathrm{Hom}_D(F-, G\Box), \mathrm{Hom}_U(E-, S\Box)) & \xrightarrow{\kappa} & \mathrm{Hom}_{UF\downarrow G}(EP_0, SP_1) \\ \zeta \circ - \downarrow & & \downarrow \xi_{P_1} \circ - \\ \mathrm{Hom}_{\mathbf{Prof}(X,C)}(\mathrm{Hom}_D(F-, G\Box), \mathrm{Hom}_U(E-, S'\Box)) & \xrightarrow{\kappa} & \mathrm{Hom}_{UF\downarrow G}(EP_0, S'P_1) \end{array}$$

が可換であることを示せばよい。これは $\theta: \mathrm{Hom}_D(F-, G\Box) \Rightarrow \mathrm{Hom}_U(E-, S\Box)$ に対して

$$\begin{array}{ccc} \theta & \xrightarrow{\kappa} & \kappa(\theta) \\ \zeta \circ - \downarrow & & \downarrow \xi_{P_1} \circ - \\ \zeta \circ \theta & \xrightarrow{\kappa} & \kappa(\zeta \circ \theta) \end{array}$$

$$\begin{aligned} (\xi_{P_1} \circ \kappa(\theta))_{\langle c,x,f \rangle} &= \xi_x \circ \theta_{cx}(f) \\ (\kappa(\zeta \circ \theta))_{\langle c,x,f \rangle} &= (\zeta \circ \theta)_{cx}(f) = \xi_x \circ \theta_{cx}(f) \end{aligned}$$

となるから可換である。 □

従って特に $X := \mathbb{1}$ として $d := G(*)$, $u := S(*)$ と書けば全単射

$$\mathrm{Hom}_{\widehat{C}}(\mathrm{Hom}_D(F-, d), \mathrm{Hom}_U(E-, u)) \cong \mathrm{Hom}_{UF\downarrow d}(EP_0, \Delta u)$$

が得られる。これは各点左 Kan 拡張の特徴付けで使用した全単射 (「Kan 拡張」の PDF を参照) である。

この補題を使えば、各点左 Kan 拡張についてより一般に次の条件が成り立つ。

命題 11. $\langle T, \eta \rangle$ が $F: C \rightarrow D$ に沿った $E: C \rightarrow U$ の各点左 Kan 拡張 \iff 任意の圏 X と関手 $G: X \rightarrow D$ に対して合成

$$\begin{array}{ccccc} X & \xrightarrow{G} & D & & \\ P_1 \uparrow & \swarrow & \uparrow F & \searrow T & \\ F \downarrow G & \xrightarrow{P_0} & C & \xrightarrow{E} & U \end{array}$$

は左 Kan 拡張である。

証明. (\Leftarrow) 各点左 Kan 拡張の定義より明らか.

(\Rightarrow) $\langle T, \eta \rangle$ が各点左 Kan 拡張だから $d \in D$, $u \in U$ について自然な全単射

$$\varphi_{du}: \text{Hom}_U(Td, u) \rightarrow \text{Hom}_{\widehat{C}}(\text{Hom}_D(F-, d), \text{Hom}_U(E-, u))$$

が存在する. $k \in \text{Hom}_U(Td, u)$ に対して $\varphi_{du}(k)_c: \text{Hom}_D(Fc, d) \rightarrow \text{Hom}_U(Ec, u)$ は

$$\varphi_{du}(k)_c(f) = (Ec \xrightarrow{\eta_c} TFc \xrightarrow{Tf} Td \xrightarrow{k} u)$$

で与えられる (「Kan 拡張」の PDF を参照).

さて $S \in U^X$ について自然に

$$\begin{aligned} \text{Hom}_{U^X}(TG, S) &\cong \int_{x \in X} \text{Hom}_U(TGx, Sx) \\ &\cong \int_{x \in X} \text{Hom}_{\widehat{C}}(\text{Hom}_D(F-, Gx), \text{Hom}_U(E-, Sx)) \\ &\cong \int_{x \in X} \int_{c \in C^{\text{op}}} \text{Hom}_{\mathbf{Set}}(\text{Hom}_D(Fc, Gx), \text{Hom}_U(Ec, Sx)) \\ &\cong \int_{\langle c, x \rangle \in C^{\text{op}} \times X} \text{Hom}_{\mathbf{Set}}(\text{Hom}_D(Fc, Gx), \text{Hom}_U(Ec, Sx)) \\ &\cong \text{Hom}_{\mathbf{Prof}(X, C)}(\text{Hom}_D(F-, G\Box), \text{Hom}_U(E-, S\Box)) \end{aligned}$$

である. この全単射を ψ と書くと, $\tau: TG \Rightarrow S$ に対して

$$\psi(\tau): \text{Hom}_D(F-, G\Box) \Rightarrow \text{Hom}_U(E-, S\Box)$$

は $\psi(\tau)_{cx}(f) = \varphi_{Gx, Sx}(\tau_x)_c(f)$ で与えられる. このとき補題 10 を使えば $S \in U^X$ について自然な全単射

$$\kappa \circ \psi: \text{Hom}_{U^X}(TG, S) \rightarrow \text{Hom}_{U^{F \downarrow G}}(EP_0, SP_1)$$

が得られる. 故に $P_1^\dagger(EP_0) \cong TG$ が分かる. この左 Kan 拡張の unit は $\kappa \circ \psi(\text{id}_{TG})$ である. その $\langle c, x, f \rangle \in F \downarrow G$ 成分を計算すると

$$\kappa \circ \psi(\text{id}_{TG})_{\langle c, x, f \rangle} = \psi(\text{id}_{TG})_{cx}(f) = \varphi_{Gx, TGx}(\text{id}_{TGx})_c(f) = Tf \circ \eta_c$$

となる. 即ち

$$\kappa \circ \psi(\text{id}_{TG}) = \begin{array}{ccccc} X & \xrightarrow{G} & D & & \\ P_1 \uparrow & \swarrow & \uparrow F & \searrow T & \\ F \downarrow G & \xrightarrow{P_0} & C & \xrightarrow{E} & U \\ & & \uparrow \eta & & \end{array}$$

となりこの図式は左 Kan 拡張である. □

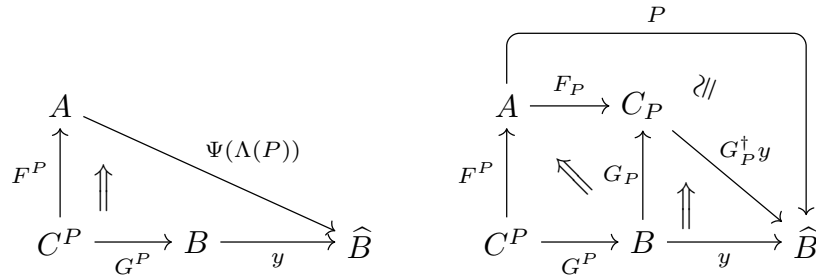
命題 12. 随伴 $\Psi \dashv \Lambda: \text{Span}(A, B) \rightarrow \mathbf{Prof}(A, B)$ が成り立つ. 更にこれの counit は同型である. 従って $\Psi \circ \Lambda \cong \text{id}$ である.

証明. 随伴であることを示すため, $(A \xleftarrow{F} C \xrightarrow{G} B) \in \text{Span}(A, B)$, $P \in \mathbf{Prof}(A, B)$ について自然な全単射

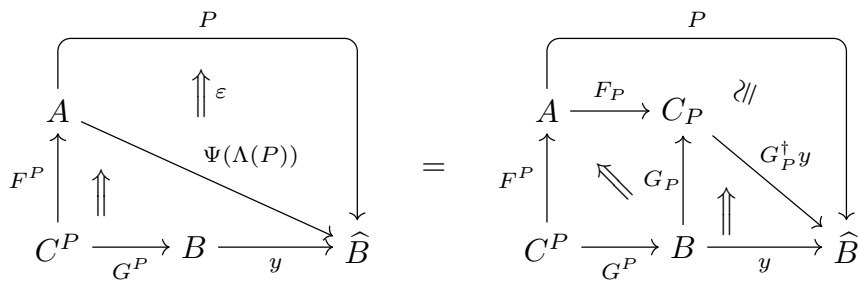
$$\varphi: \text{Hom}_{\text{Span}(A, B)}(\langle F, G \rangle, \Lambda(P)) \rightarrow \text{Hom}_{\mathbf{Prof}(A, B)}(\Psi \langle F, G \rangle, P)$$

を定義する. そのためにまず自然同型 $\varepsilon: \Psi(\Lambda(P)) \Rightarrow P$ が存在することを示す.

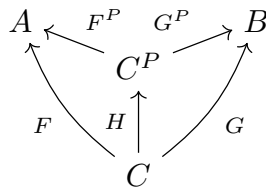
∴ 次の2つの図式を考える.



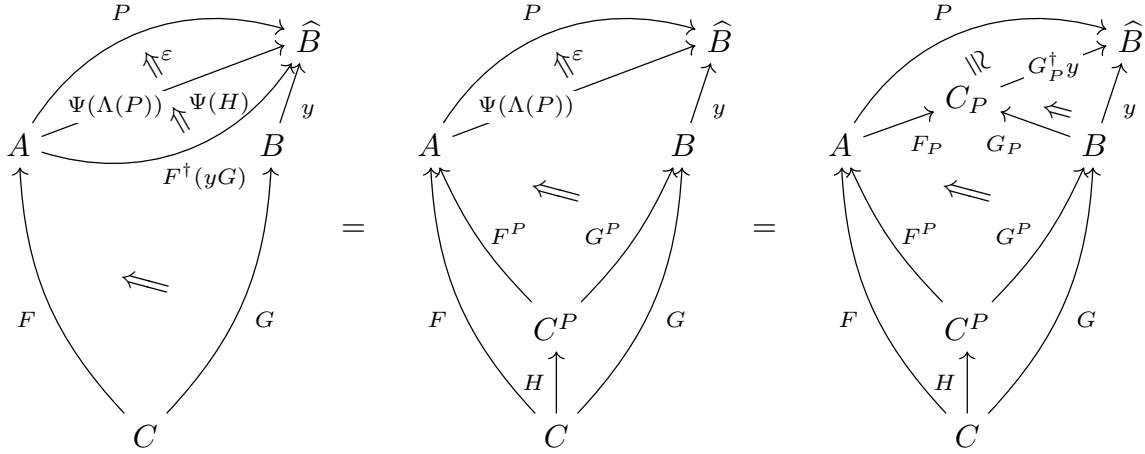
定義より $\Psi(\Lambda(P)) = (F^P)^\dagger(y \circ G^P)$ だから左の図式は左 Kan 拡張である. 一方で右の図式において, $A \xleftarrow{F^P} C^P \xrightarrow{G^P} B$ はコマ圏 $G_P \downarrow F_P$ として与えられているから, 命題 11 により $(F^P)^\dagger(y \circ G^P) \cong G_P^\dagger y \circ F_P$ が分かる. また命題 6 より $G_P^\dagger y \circ F_P = \Phi(\Sigma(P)) \cong P$ となる. 故に普遍性から自然同型 $\varepsilon: \Psi(\Lambda(P)) \Rightarrow P$ が存在して次の等式が成り立つ.



$H: \langle F, G \rangle \rightarrow \Lambda(P)$ を射とする. 即ち H は次を可換とする関手である.

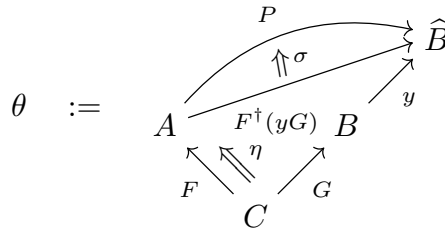


このとき自然変換 $\psi(H): \Psi\langle F, G \rangle \Rightarrow P$ を $\psi(H) := \varepsilon \circ (\Psi(H))$ で定める.



この $\psi(H)$ は全単射 $\psi: \text{Hom}(\langle F, G \rangle, \Lambda(P)) \rightarrow \text{Hom}(\Psi\langle F, G \rangle, P)$ を与える.

∴ 単射性は明らかだから全射性を示す. そのために $\sigma: \Psi\langle F, G \rangle \Rightarrow P$ を自然変換とする. このとき



と定義して, これを使って H を

- 対象 $c \in C$ に対して $Hc := \langle Fc, Gc, \theta_c \rangle$ とする.
- 射 $f: c \rightarrow c'$ に対して $Hf := \langle Ff, Gf \rangle$ とする.

と定義する. これは明らかに関手 $H: C \rightarrow C^P$ を定める. また明らかに H は射 $\langle F, G \rangle \rightarrow \Lambda(P)$ であり $\psi(H) = \sigma$ である. 故に ψ は全射である.

定義から明らかに ψ は自然である. 従って随伴 $\Psi \dashv \Lambda$ が成り立つ. ψ の定義よりこの随伴の counit は ε であり, これは同型である. \square

以上により $\uparrow := \Sigma \circ \Psi$ と定義すれば

$$\begin{array}{ccc}
 & \uparrow & \\
 \text{Span}(A, B) & \xrightarrow[\Lambda]{\Psi} & \mathbf{Prof}(A, B) & \xrightarrow[\Phi]{\Sigma} & \text{Cospan}(A, B) \\
 & \downarrow & & & \\
 & & & &
 \end{array}$$

より $\uparrow \dashv \downarrow$ となる。従って次の定理を得る。

定理 13. 関手 $\downarrow: \text{Cospan}(A, B) \rightarrow \text{Span}(A, B)$ は左随伴 \uparrow を持つ。 □

Λ, Σ が忠実充満だから $\uparrow \dashv \downarrow$ は冪等随伴である (「随伴関手」の PDF を参照)。そこで充満部分圏 $\text{Comma}(A, B) \subset \text{Span}(A, B)$, $\text{Cocomma}(A, B) \subset \text{Cospan}(A, B)$ を

$$\begin{aligned}
 \text{Ob}(\text{Comma}(A, B)) & := \{x \in \text{Span}(A, B) \mid \text{ある } z \in \text{Cospan}(A, B) \text{ が存在して } \downarrow(z) \cong x\} \\
 \text{Ob}(\text{Cocomma}(A, B)) & := \{x \in \text{Cospan}(A, B) \mid \text{ある } z \in \text{Span}(A, B) \text{ が存在して } \uparrow(z) \cong x\}
 \end{aligned}$$

で定義すれば圏同値 $\text{Comma}(A, B) \simeq \mathbf{Prof}(A, B) \simeq \text{Cocomma}(A, B)$ が得られる。

参考文献

- [1] Jean Bénabou, Distributors at Work, <http://www.mathematik.tu-darmstadt.de/~streicher/>